スタートカリキュラムにおける「学習探検」の意義

二　上　昌　基*　　木　村　吉　彦**

（平成 26 年 9 月 29 日受付；平成 26 年 11 月 4 日受理）

要　　旨

本稿は「幼児教育の成果を小学校教育に生かす」という保育所から小学校へのつながりを意識し，教科学習への円滑な移行を視点に置いたスタートカリキュラムの実践である学習探検に着目した。「学び」と「交流」の２つの視点をもとに，新入学児童の様子からその効果について検証した。具体的には，小学校 2 年生との算数，小学校 4 年生との国語の時間を検証対象とした。「学び」において 1 年生は，学習姿勢，学習規律の模範を上級生から学んだ。自分たちの学習において実践する姿，課題意識を通して活動に取り組み，課題解決する中で教科学習の喜び，楽しみを実感できた。「交流」において 1 年生は，上級生にやさしく接してもらったうれしさ，安心感を得ることができた。

これら 2 つの視点の相乗的なかかわりによって，新入学児童は安心感をもって学習に取り組み，教科学習の喜びや楽しみを味わうことができ，入学期における教科学習への円滑な移行に至った。

KEY WORDS
Start Curriculum スタートカリキュラム，Learning Exploration 学習探検，Studying Subjects 教科学習，Nursery school and Primary school Cooperation　保小連携，Smooth-Transition 円滑な移行

１　はじめに

「小 1 プロブレム」という言葉が聞かれるようになったのは平成 10 年頃のことである。新保は「小 1 プロブレム」について「教師への反発から起こる『学級崩壊』とは違い，先生にかまってもらいたい，注目して欲しい欲求の表れ」としてとらえている。さらに，「小 1 プロブレム」が問題となった背景として，「子どもたちを取り巻く社会の変化」「親の子育ての変化と孤立化」「変わってきた就学前教育と変わらない学校教育の段差」「自己完結して連携のない就学前教育と学校教育」の 4 つの問題を指摘しており（1），以後，「小 1 プロブレム」が教育現場において大きな課題の一つになってきている。

東京学芸大学「小 1 プロブレム」研究推進プロジェクトが，平成 19 年度に「小 1 プロブレム」の全国的動向を把握するための調査を行った。それによると，全体の 4 割以上が過去や現在において「小 1 プロブレム」の発生を確認していることが報告されている。発生状況を見ると，特定の地域や学校において集中的に発生しているのではなく，各地域に発生している現状を推測している（2）。このことは「小 1 プロブレム」はどの学級にも起こりうる問題であることを示すものであるととらえることができる。

このような状況の中，「中央教育審議会答申」（平成 20 年 1 月　以下，中教審答申と略記）では，幼小連携について「幼児教育と小学校教育の接続については，幼児教育では，規範意識の確立などに向けた集団とのかかわりに関する内容や小学校低学年の各教科等の学習や生活の基盤となるような体験の充実が必要である。他方，小学校低学年では，幼児教育の成果を踏まえ，体験を重視しつつ，小学校生活への適応，基本的な生活習慣等の確率，教科等の学習への円滑な移行などが重要であり，いわゆる小 1 プロブレムが指摘される中，各教科の内容や指導における配慮のみならず，生活面での指導や家庭との十分な連携・協力が必要である（3）。」とあり，その重要性を指摘している。

この中教審答申を受けた，学習指導要領等の改訂における連携の記述について取り上げる。まず，『幼稚園教育要領』（平成 20 年 3 月）では，特に留意する事項において「幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため，幼児と児童の交流の機会を設けたり，小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設けたりするなど，連携を図るようにすること。」が明記された（4）。また，『保育所保育指針』（平成 20 年 3 月）でも，小学校との連携に関する事項が新設された（5）。

*上越教育大学大学院（専門職学位課程）**学校教育学系

『小学校学習指導要領』（平成 20 年３月）の総則では，家庭や地域との連携，小学校間，幼稚園や保育所，中学校及び特別支援学校などとの連携や交流の機会を設けることについての記述がある[6]。「第２章 第５節 生活」では，第１学年入学当初において生活科を中心とした合科的な指導を行うなどの工夫をすることについての記述が見られる[7]。『小学校学習指導要領解説 生活編』（以下，『生活編』と略記）では，改善の基本方針として小１プロブレムという言葉を取り上げ，解決に向けて，生活科の果たすべき役割の大きさを述べている[8]。

また，『生活編』の幼児教育及び他教科との接続では，「幼児教育との接続の観点から，幼児と触れ合うなどの交流活動や他教科等との関連を図る指導は引き続き重要であり，特に，学校生活への適応が図られるように，合科的な指導を行うことなどの工夫により第１学年入学当初のカリキュラムをスタートカリキュラムとして改善すること[9]」と述べられ，初めてスタートカリキュラムという言葉が登場する。

以上のように，小１プロブレムなど学校生活への適応が難しい児童への対応として，保幼小連携にもとづいたスタートカリキュラムを含め，生活科への期待が大きくなってきていることが分かる。

一方，スタートカリキュラムが小学校への適応目的のみになってしまっている現状があると懸念の声も多く聞かれる。『生活編』では，「総合的に学ぶ幼児教育の成果を小学校教育に生かすことが，小１プロブレムなどの問題を解決し，学校生活への適応を進めることになる[10]」と指摘する。また，木村は，園児が「これまで経験してきた『遊び』の要素を多く含んだ活動に基づく日々が送れることは，子どもにとって『小学校でもこれまでやってきたことが通用するのだ』という自信が持てるきっかけになる。これが，スムーズな『適応』を生み出すというスタートカリキュラムの第一の意義である[11]。」と述べる。このように，園児が幼稚園や保育所で付けてきた力を小学校でも発揮できるようにカリキュラムを工夫していくことで，結果，「適応」につながっていくというスタートカリキュラム本来の意義を，改めて理解する必要がある。

本来の意義にもとづいたスタートカリキュラムの在り方を考えた場合，最も大切なのは積極的な幼保小連携を図り，幼児教育と小学校教育とのつながりのあるスタートカリキュラムとなるように工夫していくことであると考える。

２　AM 小学校スタートカリキュラム

新潟県 M 市立 AM 小学校では，今年度から全校体制でスタートカリキュラムに取り組んでいる。そこでは，AM 小学校に併設された H 保育園との保小連携に基づき，新入学児童の「適応」を促そうとしている。AM 小学校は，昨年度から木村ゼミの学校支援対象である。以下，カリキュラムの紹介を行う。

２．１　計画表

表 1：AM 小学校スタートカリキュラム１週目

平成２６年度　AM 小学校　スタートカリキュラム

（４月７日～４月１１日　第１週）

・子どもたちに安心感をもたせるため，１時間目に『おはようタイム』，２時間目に『学校探検』と固定したプログラムを組む。
・１週目の『おはようタイム』は，集団遊び等を通して，学校生活の楽しさを味わいながら，集団の中でのルールを覚えていくことをねらう。
・朝の支度，給食の準備や後片付けの時間は，６年生が１年生のサポートをする。（少人数指導型）　少人数指導型で６年生がサポートに入る。サポートマーク
〔めあて〕
○学校探検を通して，主な学校の施設の位置や使い方を確かめながら，物理的環境に慣れ親しむ。

月日	７日	８日	９日	１０日	１１日
曜日	月（げつ）	火（か）	水（すい）	木（もく）	金（きん）
よてい	新任式・始業式 入学式 PTA 役員会	給食開始 地域児童会 一斉下校	生活朝会		聴力検査
もちもの	各種提出物	毎日セット 歯ブラシ、コップ 手拭	毎日セット のり、はさみ 探検パック	毎日セット 体操着、赤白帽子	粘土、粘土板 図書用手提げ袋
あさかつどう（8:15～8:30）		持ち物の片づけを手伝う。			
あさのかい（8:30～8:40）		【朝のあいさつ，健康観察，今日の予定】「おはようございます。」「はい，元気です。」 『おはようタイム』 【自己紹介】・・・「わたしの好きな○○は△△です。」 【ゲーム】・・・・・自由遊びでなく，集団遊び（ルールのある遊び）を中心に取り入れる。 【歌・手遊び】・・・保育園で歌ったことのある歌や今月の歌を取り入れる。 【読み聞かせ】・・・朝読書の習慣化へ結び付ける。 【体操着の着替え】・脱いだものの後始末 【体操】・・・・・・・いろいろな整列の仕方、かけっこ、鬼ごっこ、準備運動、ラジオ体操 【いろんな先生】・・・級外の先生方からのお話			
1（8:40～9:25）	【学級活動】 健康観察 入学式の練習				
2（9:30～10:15）	【行事】 入学式	【生活科】　学校探検			
		教室探検① 自分の机、ロッカー トイレの使い方 廊下、階段	教室探検② ワークスペースの使い方 でんの使い方	体育館、 ミーティングルーム 給食室	保健室 教務室 校長室
20 ぶんやすみ（10:15～10:35）		５分休みや 20 分休みには，必ずトイレに行くことを声掛け。休み時間に済ませる習慣化を目指す。 教室やワークスペース，でん，グラウンドで一緒に遊びながら，安全を見守る。			
3（10:35～11:20）	【学級活動】 各種配布物確認 担任の話	【児童会】 地域児童会 集下校の確認	【道徳】 安全な下校	【体育】 ２年生とふれっこ運動 着替え、片付け	【国語】 図書室でそを借りよう
4（11:25～12:10）	保護者と下校	【学級活動】 帰りの準備 給食準備	【学級活動】 帰りの準備 給食準備	【図工・学活】 すきなものいっぱい 帰りの準備、給食準備	【行事・学活】 聴力検査 帰りの準備、給食準備
きゅうしょく（12:10～12:50）		手洗い、エプロンの着用、台ふき（～１２：００）　配膳（～１２：１５） 給食の食べ方（12：35 までカミカミタイム） 歯みがき　片付け方、後始末の仕方			
ひるやすみ（12:50～13:35）		全校下校	帰りの支度 帰りの会 下校指導 ８日～１１日は，１年生のみの下校期間とし，安全な下校の仕方や徒歩や集団で指導する。		
そうじ・チャレンジタイム（13:35～13:50）					
5（13:55～14:40）					
かえりのかい（14:40～14:50）					
時数			国語　1時間 算数　0時間 生活　5時間 音楽　2時間 図工 0、5時間	体育　2時間 道徳　1時間 特活　6時間 行事　1、5時間 総計　19時間	

表 2：AM 小学校スタートカリキュラム２週目

平成２６年度　AM 小学校　スタートカリキュラム

（４月１４日～４月１８日　第２週）

・５限学習、昼休み、縦割り班講師、チャレンジタイムの開始。
・他学年との交流（学習探検）を行うことで，各教科の学習意欲を高める。
〔めあて〕　○今週から始まる「清掃」の仕方を縦割り班のかかわりの中で学ぶ。
○昼休みの楽しい過ごし方を体験的に学び，より大きな集団の中での活動を楽しむ。

月日	１４日	１５日	１６日	１７日	１８日
曜日	月（げつ）	火（か）	水（すい）	木（もく）	金（きん）
よてい		発育測定 視力検査			校外学習 学習参観（５限） PTA 総会、懇談会
もちもの	体操着、赤白帽子 （給食エプロン） コップ、歯ブラシ 手拭、マスク				水筒 汗拭きタオル
あさかつどう（8:15～8:30）		読み聞かせボランティア	○○朝会	１年担任は，第２週目までは学級を優先し，職員朝会には出ない。	
あさのかい（8:30～8:40）		「あさのかい」 【朝のあいさつ，健康観察，今日の予定】「おはようございます。」「はい，元気です。」			
1（8:40～9:25）		『おはようタイム』 【自己紹介】・・・「わたしの好きな○○は△△です。」 【ゲーム】・・・・・自由遊びでなく，集団遊び（ルールのある遊び）を中心に取り入れる。 【歌・手遊び】・・・今月の歌を取り入れる。 【読み聞かせ】・・・朝読書の習慣化へ結び付ける。 【体操】・・・・・・リズム運動、かけっこ、鬼ごっこ、準備運動、ラジオ体操 【いろんな先生】・・・級外の先生方からのお話			フッ化物洗口 校外学習の準備
2（9:30～10:15）		【生活科】　学校探検・学習探検			【生活科・道徳・体育】 最寄山公園へ出かけよう ・きまりを守ってバスにのろう ・楽しくあそぼう ・春さがし
		家庭科室 アトリエ	２年生の算数	６年生の音楽	３年生の国語
20 ぶんやすみ（10:15～10:35）		トイレ、水飲み 自由遊び 時計が（６）になったら、教室にもどって座って待つ。			
3（10:35～11:20）		【国語】 正しい鉛筆の持ち方 初めての名前書き	【行事】 発育測定 視力検査	【算数】 ぼうけんのはじまり 10 までのかず	【国語】 はる どうぞよろしく
4（11:25～12:10）		【図工】 ２年生と一緒にゴミ箱作り	【算数】 ぼうけんのはじまり 算数セットの使い方	【音楽】 音楽室には何がある かな	【算数】 １０までのかず
きゅうしょく（12:10～12:50）		手洗い、エプロンの着用、台ふき（～１２：００）　配膳（～１２：１５）（給食当番交代） 給食の食べ方（12：35 までカミカミタイム） 歯みがき　片付け方、後始末の仕方			
ひるやすみ（12:50～13:35）		楽しい昼休み 体育館や外で自由に楽しく遊ぶ。時計が（６）になったら、次の活動の準備			
そうじ・チャレンジタイム（13:35～13:50）		そうじ（月・水・金）・・・・班長が１年教室まで迎えに来る。そうじの仕方を教えてもらう。 チャレンジタイム（火・木）・ランチルームで運筆練習			
5（13:55～14:40）		【国語】 本の貸し借りの仕方	【図工】 すきなものいっぱい② （名刺作りに使用）	【国語】 ひらがなノート	【国語】 名刺作り	【図工】 思い出にのこったことを絵にかこう
かえりのかい（14:40～14:50）		帰りの準備			
		全校下校	１年のみの下校		
時数		国語２ 生活１ 図工１ 音楽１　計５	算数１　行事１ 生活１ 図工１ 学活１　計５	国語２ 算数１ 生活１ 音楽１　計５	国語２ 算数１ 生活１ 音楽１　計５	国語１　道徳１ 生活１ 体育１ 図工１　計５

２．２　AM 小学校スタートカリキュラムにおける３つの視点と実践

H 保育園とのつながりを重視して，３つの視点において具体的な実践を計画した。

表 3：AM 小学校スタートカリキュラムにおける 3 つの視点と実践

３つの視点	実　践	実践の概要
保育園と小学校の両方に同じ名前の実践を位置づける H 保育園で経験したことを AM 小学校生活にも取り入れることで、安心感や心のゆとり、学校生活への期待を大きくすることをねらいとした実践。	**ブックタイム**	アプローチカリキュラムとして毎週水曜日と金曜日、AM 小学校が昼休みの時間帯に、H 保育園児が AM 小学校の図書室に行き、読み聞かせをしてもらったり、好きな本を見たりする時間をブックタイムとして設定した。このブックタイムを、スタートカリキュラムにも取り入れて、本に触れたり、図書室の使い方を学んだりした。
	チャレンジタイム	AM 小学校全校児童が 13 時 35 分から 13 時 50 分までの 15 分間、ランチルームで学習する時間に合わせて、H 保育園児が時間と場所を共有し、粘土やお絵かきなど自分が取り組みたいものを選び活動する。H 保育園では普段使用することが少ない机や椅子の環境に慣れ、15 分間集中して活動できるようになることを目的とした。
主体性と協調性（共通目標）の育成をめざす実践を位置づける H 保育園と AM 小学校において共通理解された、めざす子ども像の一つである「主体性と協調性の育成」に視点として取り入れられた実践。	**少人数指導型サポート活動**	朝の準備（ランドセルの片付け、学習用具の準備、提出など）、給食準備、清掃活動を中心に、新入学児童にマンツーマンで手厚くお世話するのではなく、あくまで自分でできるようになることをめざして、上学年がグループでサポートする活動。サポートする 6 年生の成長も視野に入れた互恵的な活動となるよう計画した。
	1 年生を迎える会	アプローチカリキュラムで遊びを話し合いによって決定してきた経験を生かし、一般的に招待される側である 1 年生が全校で遊ぶゲームを担当する。1 年生にも児童会の行事の役割を一つ担当することで達成感を味わわせることを目的とした。
「学び」と「交流」を目的とした実践を位置づける	**学習探検**	AM 小学校は H 保育園との併設の環境を生かし、交流活動を多く取り入れている。そこで、新入学児童の入学後、今まで行われてきたレクリエーション的な内容による他学年との交流活動を、教科学習の時間を使って行う。また、交流とともに、H 保育園において大切にしている、発達段階に応じたその時の学びである「学びの芽生え」を、小学校からスタートする教科学習での「自覚的な学び」につなげていくことも目的とし、各学年と様々な教科で学習を行った。

３　研究の目的

スタートカリキュラムを作成する際，幼児教育と小学校教育とのつながりを考えていく時に必要なことはどんなことであろうか。それは前述した「幼児教育の成果を小学校教育に生かすこと」であると考える。そのためには小学校，幼稚園，保育園の目標や運営方針，児童，園児の実態などについて，相互理解を図ることが必要である。木村は，「幼保小連携の鍵は，幼児教育と小学校教育について，それぞれの教師がお互いをよく知り，理解し合うことである[(12)]。」と述べる。連携によって得られた幼稚園，保育所の情報を，「幼児教育の成果を小学校教育に生かすこと」を視点としてスタートカリキュラムに生かしていくことは，小学校生活における新入学児童の自信につながっていくと考える。

そこで，本研究では，幼児教育とのつながりを意識し，幼児教育で付けた力を小学校教育で生かすことを視点に考えられたスタートカリキュラムの実践が，小学校における新入学児童の行動にどのように影響していくか検討することを目的とする。

４　研究の内容と方法

４．１　調査対象と調査期間

本研究における調査対象と調査期間は，次の通りである。

調査対象：新潟県 M 市立 AM 小学校

調査期間：2014 年 4 月

４．２　調査方法

中教審答申において，幼保小連携における，教科等の学習への円滑な移行の重要性が述べられている。合科的・関連的指導として，児童が幼児期に体験してきた遊び的要素と小学校生活の中心となる教科学習の要素を含んだ活動は多く実践され，幼児教育と小学校教育の円滑な接続への成果が報告されている。学習探検は，より教科学習の要素を

多く取り入れた実践である。保育園において今まで身に付けてきた力を「学びの芽生え」としてとらえ，その力を小学校教育の中で「学びの自覚化」としてつなげて生かしていけるといった「学びの連続性」に視点をおいた実践である。教科学習の学びと他学年との交流を視点とし，スタートカリキュラムの主目的である緩やかな接続だけでなく，教科等の学習への円滑な移行への可能性を検証することにつながると考え，今回，学習探検の実践を取り上げることとする。

学習探検での児童の行動と発言の観察，振り返りでの発言をもとに場面分析を行った。また，保護者や職員を対象に実施したアンケートから，学習探検に関連した家庭での児童のつぶやきや様子をつかみ，考察につなげた。

５　実践と考察

５．１　２年生「算数」での学習探検（４月 15 日）

１年生は保育園の時に,普段の活動や生活経験の中で１から 10 ぐらいまでの数であれば数えられることが職員による情報交換により確認されていた。そこで，未学習の内容ではあるが，１から 10 までの数字を用いて活動することを検討し，学習探検の学習内容を立案した。学習内容は２年生の「1000 までの数」。１年生と２年生がペアとなって活動した。１立方センチメートルのブロックを１年生が 10 個ずつまとめて２年生に渡し，２年生は 10 個のまとまりを集めて 100 個のまとまりを作った。その時の活動場面では，次のような様子が見られた。

【ブロックを数える場面】１年生の様子
○Ｔ児：「１、２、・・・10」とつぶやきながら数える。数えたらもう１回確認して数える。
○Ｔ児：数えたブロックをかためて机に並べ、２年生のＩ児に渡す。
○Ｔ児：６回目までぐちゃぐちゃにかためていたが、２年生のＩ児のまねをして縦２つ、横５つ形を作って並べたものをＩ児に渡すようになる。
○Ｍ児：２年生が 10 個のブロックを入れるために○を付けてくれた工作用紙に、２年生にかわって 100 のまとまりを完成させた。

１年生のＴ児は，ブロックを声に出しながら数え，10 個のまとまりにしてペアの２年生Ｉ児に渡した。その後，２年生のＩ児が並べている縦２つ，横５つの形を見て，自分でもそのまとめ方をまねし始めた。活動を通して，ブロックをひとまとまりにしておくより，縦２つ，横５つの形にした方が数を確認しやすいということを２年生から学んだ姿と言える。合理的な方法を知り，その方法を用いて課題解決できたという喜びは，算数という教科への興味関心を高めていくことにつながっていくものと考える（写真 1)。

写真１：学習探検２年生との算数

【ブロックを数える場面】２年生の様子
○Ｒ児：10 個のブロックを入れるための場所として、工作用紙に○を付けてあげる。
○Ｈ児：ブロックが足りないと言っている１年生に渡してあげる。
○Ｓ児：足りないブロックを他のグループからもらってくるように指示を出す。

２年生の課題である 100 のまとまりを完成させることに取り組みながらも，１年生がブロックを数える様子を見守ったり，活動の指示を出したり，１年生の様子を気にかけた行動が見られる。Ｒ児は工作用紙の上に集めたブロックが混ざり合って数が分からなくなってしまうことに気付き，１年生が数えるときに 10 個ずつまとめて置けるように，工作用紙に丸をつけ,「ブロックを数えたら丸の中に入れるんだよ」と伝えた。活動後の振り返りにおいては，１年生もこの声がけがうれしかったと発言している。

職員のアンケートにおいて,「他学年の児童も１年生と一緒に活動することで，リーダー性や上学年の意識が芽生えた。」という記述があった。１年生だけでなく，他学年の成長にもつながっていくという，学習探検での互恵的な側面であると考える。

最後に 100 のまとまりを集めて，２年生が数える場面では，１年生も自然に加わり，「100，200・・・」と声に出して数える姿が見られた。中でも１年生のＴ児は，100 のまとまりを指さし，体を動かしながら「100，200・・・1000」とうれしそうに数える姿が見られた。入学後，Ｔ児が初めて見せた積極的な姿であった

【活動終了後の１年生の振り返りの発言】（Ｔは担任）
Ｔ：気が付いたことがあったら教えてください。
Ｉ児：気が付いたこと？あった！
Ｉ児：背中ピンとしてなかった。①
Ｒ児：してたじゃん。②
Ｋ児：〇〇さんがしてなかった。
Ｔ：あとどうだった？
Ｉ児：よく聞けてた。③
Ｔ：お話よく聞けていたよねー
Ｔ：今日どうだった？難しかった？
Ｉ児：100 こが難しかった。④
Ｒ児：100 なんて簡単だったよ。
Ｔ：１年生何してくださいって言われた？100 頼まれてないでしょ。
Ｋ児：え、10 をする
Ｔ：そうだよね。10 するって頼まれたんだよね。10 はできたみんな？
Ｉ児：できた 10！
Ｔ：最後にいくつが並んだか分かった？
Ｍ児：1000！
Ｔ：すごいよね。
【ペアでの気付きの交流を終え、最後の１年生の振り返りの発言】
Ｋ児：かっと手を挙げてたの。⑤
あとね 300 とか 200 とか言ってたよ。
ね、Ｔさん。
Ｔ：Ｔさん同じ？
Ｔ児：（うなずく）
Ｍ児：２年のＲさんが丸をかいて、そこに 10 の塊をつくるんだよって教えてくれたのがうれしかった。⑥
Ｔ：みんな２年生どうだった？やさしかった？
Ｍ児：（うなずく）

１年生での振り返りでは，下線①②③⑤のように２年生の学習態度，姿勢に関する発言が多く出てきた。椅子に姿勢よく座って教師の話を聞き，手を挙げて発言するといった様子は，教科学習の基本スタイルであるが，保育園との大きな相違点の一つであり，１年生にとって印象に残る場面となったと考える。また，同時に小学校での教科学習の様子がつかめたことで，自分たちの学習の進め方の模範としていけることが考えられる。

下線④は，算数の教科特性に関する発言である。生活経験の中で聞いたことのある 100 という数字であったが，実際に数えてみることでブロックの多さを実感し，そのことが難しさとして表現されたものと考える。下線⑥は，２年生との交流の視点での発言である。ペア活動を通して，２年生がやさしく接してくれたことが１年生の喜びとなっている。入学期に上級生と一緒に学習するという状況で，少なからず緊張感を感じている１年生にとって，上級生からの声がけ，活動のリードなど１年生を気遣ってくれる行動は，緊張感を軽減させることにもつながっていくものと考える。

５．２．　１年生「算数」の教科学習スタートの様子（４月 15 日）

２年生との学習探検をおこなった同じ日の３時間目に，１年生の算数の学習が行われた。その時間の導入において，次のような様子が見られた。

【１年生初めての算数学習の導入における学習探検の振り返り】（Ｔは担任）
Ｔ：算数ってなにするんだろうね。
　２時間目に２年生の算数見てきたよね。
　どんなお勉強だった？
　黒板に先生何書いてあった？
Ｒ児：１
Ｔ：あー１書いてあった。あとは
Ｓ児：計算問題
Ｉ児：９
Ｔ：すごい。良く見てたね。数って言うんだよね。
　１と９の他に知っているのある？
Ｉ児：３
Ｋ児：４
Ｋ児：５、６
Ｔ児：６
続けて７，８，９，10をＫ児、Ｔ児、Ｉ児で言う。
Ｔ：そういうのいっぱい黒板に書いてあったよね。
　じゃあみんなは２年生と一緒に何したの？
Ｋ児：数数えた。
Ｔ児：いくつ数えたの？まねしてやってみて
Ｋ児：10こ
Ｒ児：40こ
Ｔ：小さい積み木全部でいくつあったんだっけ？
Ｉ児：1000こ？
Ｔ：1000こってすごいよね。ものすごい多いなあと先生思ったけどみんなどうだった？
Ｋ児：少なかった。

学習探検において，自分が目にした数字や数えた数字について積極的に発言する姿が見られた（写真2)。算数は計算や数字が出てくる学習であったことが，学習探検の振り返りを通して実感されていたと考えられる。自分たちも知っていた１から10ぐらいまでの比較的小さい数字が，２年生で学習する1000という数字につながっていくことを，体験を通して学んだことは，算数という教科学習への興味・関心の高まりにつながる一つの要因になったと考える。

導入後，算数の教科書にある動物探しを行った。絵の中にいる動物を見つける活動であった。１年生児童は見つけたものを発表したが，担任が発表の機会をとらえて，発表時に手を挙げることと立って話すことの２つの学習ルールを指導した。この２つのルールは，学習探検において２年生が見せていた姿であった。担任は２年生の発表の様子について「どうだった」と１年生に尋ねながら確認し，指導を行った。前述通り，子どもたちにとって２年生の発表場面は印象深く心に残っており，想起しやすい場面であったと考える。その後，１年生児童は，全員が積極的に元気よく手を挙げ，立って発言することができた。職員アンケートにおいても「上学年児童の学習の様子が模範となり，張り切って学習に取り組もうとする様子が見られた。」という記述が見られた。発表場面の様子を学習探検で見せてもらっていたことで，自分たちもあのように話せばいいんだということがイメージできたことが行動として表れていると推察できる。

このように，学習ルールを学ぶことは，教科学習を進めていく上での一つのスタイルを知ることとなり,「小学校の勉強はこんな風にやっているんだな」という安心感につながるとともに，教科学習への期待も大きくさせる一要因としてとらえることができる。

写真２：１年生「算数」教科学習初日

５．３　４年生「国語」での学習探検（４月 17 日）

４年生の国語の物語文である「白いぼうし」の音読発表を聞く活動であった（写真３）。１年生が保育園の年長児のとき，アプローチカリキュラムで実施したブックタイムの影響で，12 月ごろから読み聞かせへの興味・関心が高まり，保育士から毎日読み聞かせをしてもらっていた。お話を聞く経験をたくさんしてきていることを受け，今回の活動内容に決定した。４年生は３つのグループに分かれており，初めに音読発表のめあてを１グループずつ発表した。その後，グループごとの練習となり，１年生も３つに分かれて各グループのところへ行き，練習の様子を参観した。練習後，１グループずつ音読発表を行った。発表ごとに１年生に尋ねた感想では以下のような発言が出てきた。

写真３：１年生「国語」教科学習初日

【音読発表を聞いた後の１年生の感想（１）】（Ｔは担任）
１班
Ｔ：今の発表を聞いてどんなふうに感じましたか？
Ｔ：他にお話しできる人いますか？
Ｉ児：（挙手）夏のお話ですか？①
Ｔ：どうですか？
４年生：いいです。
Ｋ児：（挙手）レモンのお話。②
Ｔ：どうですか？
４年生：近い。
Ｉ児：（挙手）夏ミカンのお話。③
４年生：いいです。
Ｔ：４年生は１年生のお話を聞いて思ったことはありますか？
４年生：みんな１場面の話をちゃんと分かっていてくれてよかったです。④

Ｉ児とＫ児は，下線①②③のように音読発表を聞きながら自分なりに聞き取った内容を伝えようとした。興味をもって話を聞くことは，国語の「話すこと・聞くこと」においても大切にされている内容である。２人の発言は，音読をしっかりと聞いていたことを表すものであり，この姿勢は，物語の内容をつかんだり，読み取ったりする力につながっていくと考える。しかし，発言児童が固定した様子が見られた。１年生のどれだけの児童が音読の内容を聞き取ることができていたか確認することができなかった。４年生は，下線④で音読を聞いてもらえたことへの喜びを話している。これは，学習探検における「交流」から得られたものであり，音読発表会という活動内容の互恵的な側面であると考える。

【音読発表を聞いた後の１年生の感想（２）】（Ｔは担任）
２班
Ｔ：１年生のみなさんにクイズを出したいと思います。
Ｔ：運転手の男の人の名前、分かる人はいますか？
Ｙ児とＩ児が挙手
Ｙ児：松井さんです。

２班の音読発表では，発表後，クイズ形式で１年生に物語の内容について尋ねた（写真４）。１班の時に発言しなかった児童が新たに挙手し，発言する姿が確認された。クイズ形式で答えやすかったことも要因の一つと考えられる。しかし，挙手したのは９人中２人であった。内容が聞き取れていないか，全体の前で挙手して発言することは緊張感が大きく，難易度が高いのかが影響するものと考える。

写真４：音読発表後の感想発表

【音読発表を聞いた後の１年生の感想（３）】（Ｔは担任）
３班
Ｔ：工夫をしたところはどこだったんですか？
４年生：「よかったね、よかったよ」のところを３人で読んで、大きい声と小さい声で。
Ｔ：１年生のみなさん。「よかったね、よかったよ」のところを３人で読んでいたの分かった人います？⑤
M児：挙手
１班
Ｔ：今の発表を聞いてどんなふうに感じましたか？
Ｔ：お話の中身が分かった人？
Ｉ児：挙手
Ｔ：Ｉ児さん。何が分かった？
Ｉ児：いすに座っているのが、車に乗っているみたいだった。⑥

感想（３）は，４年生の音読の工夫について１年生の反応や発言である。M児は，発表者の近くで音読を聞いており，下線⑤にある３人で声を合わせて読む工夫に気付いていたようだが，そのことが，音読の工夫であることは４年生の話で気付いたと考えられる。Ｉ児は，４年生が椅子に座りながら音読していた場面を想起し，発言した。Ｉ児は音読の内容からタクシーに乗っている場面をイメージできており，椅子に座っている様子と併せて下線⑥のように発言したと考える。

音読の楽しさの一つでもある，音読の工夫を新たに知ることは，自分にもできそうだ，やってみたいという思いを強くし，音読への興味関心の高まり，国語の学習への期待につながっていくものと考える。

【活動終了後のペア交流場面での１年生の振り返りの発言】（Ｔは担任）
Ｉ児　お話しするのがすごかった。⑦
M児　本を読むのが上手。⑧
Ｉ児　車を工夫したところがすごい。
M児　車の感じがした。ダンボールなしでもいすだけでやっていた。
【ペアでの気付きの交流を終え、最後の１年生の振り返りの発言】
Ｔ：国語って何をする勉強だと思った？
Ｋ児：本を読む勉強をしていた。⑨
Ｉ児：字が上手だった。
Ｋ児：見た！黒板に書いてた。
Ｉ児：車を工夫していた。
Ｓ児：長いお話を読んでいた。すごい。⑩

音読発表会であったことから，１年生児童からは下線⑦⑧⑨⑩のように，４年生が読むことが上手であったことへの発言が多く聞かれた。国語は読む勉強をするものだという一つのイメージができたものと考える。一方で，音読した「白いぼうし」の内容に関する発言はなかった。直接見たり，聞いたりしたことが印象として残ったようであった。

音読発表会での学習探検は，１年生にとっては参観することが中心となり，「交流」の視点での発言が少なかった。一方で，音読の模範からうまさや工夫を学び，音読への意欲を高める一要因となったと考える。話の内容を聞き取らせるためには，児童の発達段階も考慮し，場面の挿絵を見せるなど場面をイメージしやすくする工夫が必要であると考える。

５．４　１年生「国語」の教科学習スタートの様子（４月 17 日）

４年生との学習探検をおこなった同じ日の３時間目に，１年生の国語の学習が行われた（写真５）。教科書の「はる」の詩の音読であった。初めは座ったままで，先生の後に続いて音読した。その後，自分たちで間をとりながら音読できるようになり，担任が「４年生のように立って読んでみよっか」と投げかけるとＴ児が「えー」と疑問の声を出した。これは「４年生のように音読できるだろうか」というものであった。実際，この後，教科書を持ち，全員で立って音読することができたが，最後に担任の「みんなの前で４年生みたいに読んでくれる人」の投げかけに，Ｔ児は挙手して音読を行った。Ｔ児は学習探検時から振り返りにおいて積極的に発言していた児童の一人であった。４年生の

音読発表会の様子を参観し，音読への興味・関心は高まっていたと想像できる。全員で音読した後，自分なりに音読できたことが自信となり，その後の行動に結びついたと考える。その後，Ｆ児，Ｍ児と二人の児童が挙手し，音読を披露した。Ｆ児においては，緊張しやすい性格で，普段はおとなしく，自分から手を挙げて発言する機会の少ない児童であった。みんなの前で堂々と音読することができ，大きな拍手をもらった。

学習探検において音読の様子を参観したことを受け，１年生の国語の教科学習スタートに音読を取り入れて活動したことにより，２つの時間の学習内容につながりが生まれ，スムーズに国語の学習に入っていくことができた。学習探検では発言がなかったＦ児が，１年生の前で，一人で音読するという緊張が伴う活動に積極的に挑戦できたのは，学習探検を通して，自分も４年生のように音読してみたいという意欲，あこがれが影響していたことが推察される。また，学習探検と国語学習のスタートを同日に位置付けたことは，学習探検で高まった気持ちをすぐに自分たちの学習につなげることができ，教科学習への期待の高まりに大きな効果が得られた。

写真５：１年生「国語」教科学習初日
音読の様子

６　成果と課題

保小の情報交換による園児の実態把握をもとに計画された学習探検では,「学び」と「交流」の２つの視点においてその効果が確認できた。

教科学習での学びにおいて，課題解決は必要不可欠なものである。2 年生との算数の学習探検では，１年生はブロックを 10 個ずつ数えるという明確な課題があった。間違えずに声に出しながら数え，課題を解決していくことは自信となった。また，グループの２年生と協力して 100 個のまとまりをつくるという活動では，課題解決とともに，協同的に学ぶ楽しさも味わうことができた。もう一つ，４年生との国語の学習探検のように，学習の様子を参観することから，国語という教科の学習内容，学習規律やルールなど教科学習の様子を知ることができた。そのことは，教科学習への意欲を高めたり，１年生なりの見通しをもてたことから，安心感へとつなげたりしていた。交流では，上級生にやさしくしてもらった，分からないところを教えてもらったという喜びや，支えてもらえるという安心感を得ることができた。学びと交流の２つの場面において得られたものが，相乗的にかかわることで，さらに教科学習への段差は緩やかなものになったのではないかと考える。

入学期において，新入学児童と他学年との交流は一般的にレクリエーション的なものが多い。みんなが楽しく参加できる一方で上級生も活動に夢中になり，新入学児童との関係性が構築しにくくなるという点もある。学習探検のように，教科学習の場面は系統的なものであることから，教える側，教えてもらう側がはっきりし，学年間の関係が構築しやすいという利点も確認できた。

なお，今回は一つの学年につき，１教科を選択し，実践を行った。どの学年において，どの教科でどんな学習内容で実践を進めていくことが教科学習への円滑な移行に，より効果的であるか検証が求められる。

参考・引用文献

（１）　新保真紀子「『小１プロブレムに挑戦する』」明治図書 2006, p. 110.
（２）　東京学芸大学 小１プロブレム研究推進プロジェクト「小１プロブレムと幼小連携に関する調査」2007.
（３）　文部科学省「中央教育審議会答申」2008
（４）　文部科学省『幼稚園教育要領』2008，p. 12.
（５）　厚生労働省『保育所保育指針』2008
（６）　文部科学省『小学校学習指導要領』2008
（７）　前掲（６）, p. 73.
（８）　文部科学省『小学校学習指導要領解説 生活編』2008
（９）　前掲（８）, p. 7.
(10)　前掲（８）, p. 45.
(11)　木村吉彦『生活科の理論と実践』日本文教出版, 2012, p. 86.
(12)　前掲（１１）, pp. 74-75

The Importance of “Learning Exploration” in the Start Curriculum

Ｍａｓａｋｉ　ＦＵＴＡＧＡＭＩ*　Ｙｏｓｈｉｈｉｋｏ　ＫＩＭＵＲＡ**

ABSTRACT

This study focuses on “learning exploration” as a practice of the start curriculum which puts an aspect on children’s smooth transition to studying subjects at elementary school in consideration of their achievements in primary education. In this study, I have clarified the effect of“ learning exploration” from two viewpoints of ”learning” and “exchange” through the observation of new first graders. I observed them in a math class with second graders and a Japanese class with forth graders. In terms of learning, they were taught learning attitude and learning discipline from senior students. They took part in activities with their personal goals in mind and felt happy and pleased with studying subjects through pursuing them. In terms of exchange, they felt kindness of their seniors and a sense of relief.

The multiple relationship of these two viewpoints encouraged the new first graders to take part in their learning activities with a sense of relief and made them happy and pleased, which led to the smooth transition to studying subjects at the beginning of their school life.

*Joetsu University of Education（Professional Degree Program）**School　Education